

論説文ではしばしば、対立する要素をあげて比較・対照することにより、自分が主張したい内容を浮き彫りにするという論理構造が見られます。このような原則を本書では、**A vs. B の〈二項対立〉**と呼ぶことにします。次の問題は、一見ただの穴埋めのように見えますが、典型的な二項対立の考えを用いて読んでいるかを問うものです。

■ 次の英文を読み、文中から適切な1語を選んで空所を埋めよ。 [91年]

① Great cities are strange phenomena. ② It is wrong to compare them with beehives, for in a beehive the wish of the individual has been unquestioningly sacrificed to the good of the community. ③ Had we ascended from the bee perhaps the greatest happiness we could achieve would be an unspectacular death in the service of London. ④ But in London, as in all modern cities it is the ( ) that counts. ⑤ Our eight millions split themselves up into ones and twos: ⑥ little men and little women dreaming their private dreams, pursuing their own ambitions, crying over their own failures, and rejoicing at their own successes.

**Notes** beehive 「ミツバチの巣(箱)」 unquestioningly 「疑いなく、絶対」 sacrifice A to B 「AをBのために犠牲にする」(その受身) the good 「利益」 unspectacular 「めざましくない、目立たない」 in the service of 「~のために」 split A up into B 「AをBに分ける」 cry over 「~のことで泣く」

### 研究

選ぶべき語の選択肢はない代わりに、文中からその語句を選ばせる問題です。まず、第①文と第②文のつながりを見てみましょう。

① Great cities are strange phenomena. <主論文>



② It is wrong to compare <具体化説明>

them (= great cities) with beehives, for { in a beehive }  
A (大都市) vs. B (巣箱) + <根拠・理由の提示>

the wish of the individual has been { unquestioningly } sacrificed to  
A (個) vs.  
the good of the community.  
B (社会)

「①大都市は奇妙な現象である。②大都市をハチの巣と比較するのは間違いである。というのも、ハチの巣においては、個体の願望は間違いなく社会の利益に対して犠牲にされてきたからである」

ここで早くもAとBの〈二項対立〉が登場しています。確認できたでしょうか？

A = 大都市: great cities vs. B = 巣箱: beehives

書き出しの第①文(=主論文)「大都市は奇妙な現象である」が、第②文で具体的に〈補足・説明〉されています(⇒ 抽象 → 具体)。しかも、第②文の for 以下の部分で、「というのも、巣箱では、個々の願望が社会のために犠牲にされてきたことは間違いがないからである」と述べられています(⇒ 根拠の提示)。もちろん、この for は前置詞ではなく、「というのも...だからである」と理由を補足する接続詞です。

さらに、もう1つの二項対立が述べられていることにも注意してください。

個(个体): the individual vs. 社会(全体): the community  
(A < B)

次に第③文と第④文のつながりにも注意してください。

③ **Had we ascended** from the bee perhaps

the greatest happiness [  $\phi$  we could achieve ④ ] **would be** an unspectacular death in the service of London.

「もし我々の祖先が蜂だったら、おそらく我々が達成できる最大の幸福はロンドンのためにひっそりと死ぬことであろう」

文頭の Had は、いわゆる仮定法(反実仮想)の条件部分ですが、if を用いない倒置形となっています。内容は「我々が蜂なら London (=大都市)のためにひっそりと(unspectacular: 目立たないように)死ぬことが最大の幸福であろう」ということです(ascend from the bee とは「我々が(先祖である)蜂から進化する」という意味)。つまり、蜂の世界での優先順位は、「社会 > 個」であるという第②文の内容を、この第③文がさらに〈補足説明〉しているという〈論理的整合性〉が見て取れます。

そして第③文と第④文は、逆接の接続詞 But でつながっています。